【ポスター発表】

放課後等デイサービスの支援者・保護者を対象とする量的調査(2)

－保護者の満足度、支援のニーズ、利用者評価の分析・検討－

○　福山市立大学　　八重樫　牧子（会員番号 001335）

泉　宗孝（新見公立大学・会員番号:005363）

〔キーワード〕：放課後等デイサービス、満足度、利用者評価

１．研 究 目 的

放課後等デイサービス（以下、放デイ）は2012（平成22）年4月にサービス開始となり、2015（平成27）年4月には、「放課後等デイサービスガイドライン」が示された。2024（令和6）年7月には、変化した社会状況に合わせ全面改定が行われ、放デイの位置づけは変化してきている。本研究では、放デイの保護者を対象に、放デイへの満足度・支援のニーズ・利用者評価の分析により、今後の放デイの役割・機能、必要な実践について検討を行うことを目的とする。

２．研究の視点および方法

放デイを利用する保護者および支援者へのインタビュー調査結果から、質問内容を作成し、放デイを利用する保護者を対象に質問紙調査を実施した。本発表では、保護者の満足度に着目し、①属性と満足度の関連性、②満足度と利用者評価の関連性について分析を行う。なお、③ニーズと利用者評価の関連性についても検討をしておく。(1)調査対象：A 県における放デイ（26 か所）の保護者（有効回答数 149 名）。(2)調査期間・調査方法：2024（令和 6）年 6 月～11 月に、A 県内の放デイ 26 事業所を対象に、無記名式の質問紙調査を実施した。回答は Google Form を用いてオンラインで収集した。(3)調査内容：①保護者の属性（9 項目）、②利用する放デイのサービス提供に関する満足度、③支援内容のニーズに関する 40 項目、④支援の現状についての利用者評価に関する 40 項目。(4)分析方法：各質問項目の基礎集計を行った。従属変数である満足度・ニーズ・利用者評価についてシャピロ・ウイルク検定を行った結果、いずれも正規分布をしていなかった。そこで、①保護者者の属性と満足度・ニーズ・利用者評価との関連性を検討するためは、Mann-Whitney 検定や Kruskal-Wallis の検定を行った。②ニーズと利用者評価の関連性を検討するためには、ウィルコクスンの符号付き順位和検定を行った。③利用者評価と満足度の関連性を見るために、利用者評価を 4 つのカテゴリー（①運営・環境、②子どもへの支援、③保護者支援、④地域連携）に分け、Spearman の相関係数を算出し、さらに満足度を従属変数、利用者評価を独立変数とする重回帰分析を行った。分析には IBM SPSS Statistics v29 を使用した。

３．倫理的配慮

質問紙調査に、調査協力有無の質問項目を設け、協力すると回答した人を本調査に同意を得たものとした。調査は無記名式で実施し、結果の集計はすべて統計的に処理し、個人

が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。本研究は、新見公立大学研究倫理審委員会の承認を得ている（承認番号304）。

４．研 究 結 果

（1）保護者の属性と満足度の関連性：年齢区分（3区分）、家族形態（3区分）、子どもの学年（2区分）、通学している学校種別（3区分）、医療的ケアの必要性（2区分）、子どもへの支援の必要性（4 区分）、個別支援計画書の作成方法（2 区分）、通級指導経験の有無（2区分）、回答者の雇用形態（4区分）のすべての属性と満足度の間には有意差は認められなかった。（2）保護者の利用者評価と満足度の関連性：重回帰分析を行った結果、③保護者支援カテゴリーでは、「保護者との積極的なコミュニケーション」（t＝2.132、p=0.041）、「発達状況・課題の保護者と事業所での共通理解」（t＝2.373、p=0.024）の評価は満足度に正の影響を与えていた（調整済みR2乗＝0.433）。④地域連携カテゴリーでは、「放課後児童クラブや児童館との交流・活動」（t＝－2.127、p=0.047）の評価は満足度に負の影響を与えていた（調整済みR2乗＝0.56）。なお、①運営・環境カテゴリー（調整済みR2乗＝0.131）と、②子どもの支援カテゴリー（調整済みR2乗＝0.208）は、モデルとして適合していなかった。（3）ニーズと利用者評価の関連性：多くの支援項目（40項目中33項目）で有意差が認められ、ニーズが利用者評価を上回っていた。有意差が認められなかった7項目は以下の通りである。「平日、休日、長期休暇に応じた活動設定」、「子どもが望む遊びへの支援」、「様々な体験ができる機会の提供」、「子どもの意思や自主性を尊重した支援」、「自然に触れる機会」、「学校の学習（宿題等）への支援」、「保護者同士の交流・連携に関する支援」、「家族支援に関する利用日数および利用時間」。

５．考 察

（1）属性と満足度の関連性：放デイのサービスに対する保護者の満足度は、個々の保護者の属性（背景）とは関連がなかった。満足度には、放デイのサービス内容や提供方法が影響を与えていると思われる。（2）利用者評価と満足度の関連性：放デイでは、子どもへの直接的な支援よりも、保護者との関係性が満足度に影響を与えているのではないかと考える。また、放課後児童クラブや児童館との交流・活動については、保護者にとって満足感を与えるような活動が行われていないことが推察される。（3）ニーズと利用者評価の関連性：多くの支援項目において、保護者のニーズが利用者評価を上回っていた。今日、放デイに求められる支援内容が年々高度化・多様化しており、実際に提供される放デイのサービスが保護者のニーズに応えることができていない現状があるのではないかと思われる。一方、有意差がなかった支援項目の多くは、ニーズに応える活動ができていたと考える。ただし、「保護者同士の交流・連携に関する支援」は、ニーズが低く、実際の活動もあまり行われていないかではないかと推察される。

注：本研究は、令和4年度～令和6年度科研・基盤研究(C)(一般)・課題番号22K02036「今後のインクルーシブな社会に向けた放課後等デイサービスの在り方について」（研究代表者：泉宗孝、研究分担者：八重樫牧子、末光茂）の一部である。